毎日新聞　コラム「三重～る経済」
掲載日　2023年8月28日
タイトル　インバウンドの観光誘客
執筆　百五総合研究所　水谷幸資

先日、伊勢の「おかげ横丁」へ出かけたところ、大勢の参拝客で大変にぎわっていた。外国人観光客も混じって飲食する光景は、コロナ禍前の状態に戻りつつあると感じられ、印象的であった。

三重県では以前から、県内に宿泊する外国人観光客が少ないことが課題となっている。観光庁の「宿泊旅行統計調査」によると、三重県での宿泊者数に占める外国人の割合は、コロナ禍前の２０１９年で４・５％と全国平均１９・４％より14・9ポイント低かった。今年1月～5月の累計でも、2・2％(全国平均16・7％)と低く、全国43位と下位にある。

国内の旅行者は、人口と同様に減少することが予想されている。観光を主要産業とする地域では、観光消費額の減少が地域の経済に及ぼす影響が大きいことから、特に消費単価が高い富裕層の外国人観光客の取り込みが重要となる。

観光庁は、今年3月に、インバウンドの本格的な回復を見据えて、全国で11のモデル観光地域を選定し、その一つに伊勢志摩及び周辺エリアを選定した。訪日外国人の高付加価値旅行層（1人あたりの消費額１００万円以上）を地方へ誘客するための集中的な支援を行う。

観光庁はモデル地域に対し、高付加価値旅行層向けの上質な宿泊施設の整備や、観光資源の発掘・磨き上げ、ガイド等の人材育成、海外セールスを支援していくとしている。今回の選定を受け、伊勢志摩観光コンベンション機構(伊勢市)は、伊勢神宮や豊かな自然、地域に根付く文化などから「唯一無二の滞在価値」を創出し、磨き上げる。ガイドやスタッフのホスピタリティーの向上も進めていく方針だ。

外国人観光客は国・地域によって買い物や観光地に対する趣味嗜好(しこう)などが異なっており、それぞれに応じた細やかな誘客活動が必須となる。こうしたプロモーションや観光コンテンツの内容充実に取り組むことが、今後の三重県のインバウンド振興の一つの方向性となるのではないだろうか。